江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

編集長 昆　吉則

組み換え作物の国内生産を目指せ

ＦＡＯの統計を見てみると、２０２０年のウクライナによるトウモロコシ（Maize）の輸出は、米国、アルゼンチン、ブラジルに次ぐ２７９５万ｔで世界４位だった。小麦も、ロシア、米国、カナダ、フランスに次ぐ１８０５万ｔで世界５位である。その輸出国・ウクライナがロシアに侵略をかけられて戦火の中にある。

一方、日本は小麦が世界13位の輸入国であるが、トウモロコシにおいてはメキシコに次ぐ世界２位の１５７７万ｔの輸入国である。我が国は、エネルギーと同様に国内生産はほぼゼロである。しかも、２０２０年度では日本とほぼ同じ１５７３万ｔの中国は、ここ数年大幅に輸入量を伸ばしており、今後さらに増やすことが予想される。その金の力に任せての爆買いは世界の市況を上昇させるとともに、日本も大きな影響を被ることになるだろう。加えて、ロシア原油の輸入禁止の世界の動きを考えると、現在でも高騰している国際物流コストはなおも上昇することは間違いなく、実際に我が国の輸入価格はもっと高騰するだろう。

輸入トウモロコシの用途は約７割が畜産飼料である。輸入トウモロコシの市況が上昇すると大豆などの他の穀物に変えて供給価格を抑えることがなされてきたが、今やすべての穀物が高騰しており、我が国の畜産、酪農は大きな打撃を受けざるを得ない。

こうした輸入の危うさを感じる中で世界の大生産国の数量や面積を見ると、我が国での（子実）トウモロコシ生産が１０００haを超えたと以前に書いたが、その数字の開きに改めて愕然とする。

もとより、子実トウモロコシの国内生産を勧めるにあたって、我が国がNon-GMトウモロコシを１５０万ｔ程度輸入していることに市場を求めたわけだが、現在の輸入トウモロコシの状況を見ると、Non-GMと言わず輸入品との価格競争力を持ち得る。国内生産でトウモロコシを自給するなどとは言わないが、その生産拡大を考えるべきではないか。

Non-GMトウモロコシ生産に取り組んでみて、特に府県では水田の排水の悪さとともにアワノメイガによる食害の被害に悩まされる生産者を見てきた。温暖化の進行により北海道でも被害は拡大していくだろう。とはいえ、防除の作業手段も限られており、生産コストにもかかわる。ラウンドアップ耐性はなくとも害虫抵抗性を持ったトウモロコシであれば、とつくづく思わされる。

一部の道県を除けば現在でも遺伝子組み換えの作物栽培は法的にも不可能ではない。遺伝子組み換え大豆でも、大豆に対するラウンドアップの畦間施用は登録が取れており、その考えに基づけば農薬登録上の問題もない。トウモロコシなら既存の除草剤でも問題はなく、むしろ害虫抵抗性品種を作れれば収量も生産面積も増えるはず。

遺伝子組み換え作物の商業生産が始まったのは１９９６年。以来、反対派の人々が言うような健康被害は起きず、反対派も攻撃の対象をラウンドアップ（グリホサート）に変えている。その批判に関しても科学的には答えは出ている。

本誌はこれから「遺伝子組み換え作物の国内生産を目指して」というシリーズを始めようと思う。